

期日：令和8年1月29日（木）

時間：10：30～12：00

会場：生涯学習センター視聴覚室

1 開会

2 所長あいさつ

7月の第1回委員会以降の半年間、委員の提言を指針として事業を展開してきた。今年度は、事業や講座の参加者から「課題解決の糸口が見付かった」「現場で実践したい」という前向きな評価を多数得ており、職員が現場のニーズや本質的な課題に寄り添ってきた成果が表れている。今後も秋田の未来を担う方々の活力となり、真に頼りにされる拠点であり続けたい。本日は今年度の進捗と次年度の構想を説明する。各委員の専門的見地から忌憚のない意見を賜りたい。

3 出席者自己紹介

4 委員長あいさつ

2026年は、寺中構想による公民館創設から80年、臨教審による生涯学習体系移行から40年、生涯学習の理念が盛り込まれた教育基本法改正から20年という歴史的な節目が重なる年であり、社会教育、生涯学習研究の領域において重要な時期に当たる。社会教育主事や社会教育士の養成に関する議論の高まりにふれ、これまでの施設や団体を中心とした活動から、誰が社会教育を担うのか、人材重視の方向への転換点を迎えている。

センターの様々な事業や動きは、今後の社会教育、生涯学習にとって大きな意味をもつ。本日の委員会において様々な意見をいただきたい。

副委員長あいさつ

生涯学習奨励員を務める中で、生きること自体が生涯学習であると思っている。いろいろな人との出会いがメリットで、刺激となり生きることにつながっている。

世界は覇権争いや紛争など厳しい状況にある。その中で社会教育、生涯学習をどう結び付けていったらよいかを考えると、生きていくための強い心を育むことが重要である。昨年12月の奨励員の研修会では、手話講座の受講後、奨励員側の発案でセンター職員へ抹茶をふるまう交流をおこなった。与えられるだけでなく感謝の気持ちを自ら考え行動で示したことは大きな進歩であった。本日の委員会を通じさらに学びを深めていきたい。

5 案件

(1) 生涯学習センターの機能および事業等のあり方について

①総務チーム

○利用状況および施設の現状について（総務チームリーダー）

- ・今年度12月時点の利用者数は前年度比約5.5%減（2,696人減）であり、通年でも減少の見込みである。主な要因は設備の不調による、定員の多い講堂の稼働率低下に加え、近隣でのクマ目撃情報に伴う夜間利用停止（11月中旬～12月末）の影響である。夜間利用は1月予約分より再開している。
- ・青少年交流センター「ユースパル」の休館に伴い、同施設に事務所を置いていた青少年関係3団体（ボーイスカウト秋田県連盟、ガールスカウト秋田県連盟、秋田県レクリエーション協会）が、1月より当センター3階小会議室へ事務所を移転した。
- ・「県立社会教育施設の再編等に向けた基本的な方針（素案）」における当センターの評価として、生涯学習・社会教育の推進及び実践の中核機関として、多様なニーズへの対応及び人材育成や調査研究成果等の普及啓発を行うことが求められており、必要とされる機能と言える。
- ・今後も一定の利用者は確保される見込みはあるが、貸館稼働率は高いとは言えず、施設老朽化に伴う改修コストの懸念、ユースパルとの代替性などが考えられている。4月以降、これらに基づき、さらに検討が進められるものと思われる。今後も安心・安全な運営のため職員間の情報共有と関係機関との連携を強化していく。

②学習事業チーム

○今年度の特徴的な取組について（学習事業チームリーダー）

- ・センターには3つの機能があり、これらをネットワーク化して効果を高めている。今回は、年度当初の予定にはない年度途中で依頼されて実施した「予定にないもの」をメインに紹介する。主なコンテンツは「障害者の生涯学習」「防災」「『熟議』による地域づくり」の3つである。「学びを止めるな」という思いを大事にしており、自分たちが行くことで学びが広がるのであれば喜んで引き受けるという姿勢で取り組んでいる。
- ・あきた元気ムラ交流会では、新聞紙でのスリッパや皿作り、簡易トイレの展示などを行い、楽しく学ぶ防災を実践した。センターの講座に参加した方から「ぜひ、あきた元気ムラ交流会でも」とお声掛けいただいたものである。
- ・ウェルビューいずみ（障害者施設）では、昨年度の障害者スポーツ体験をきっかけに依頼があり、新聞紙の活用や水で戻すカップ焼きそばの体験をおこなった。
- ・羽後町では、奨励員の講座参加がきっかけで企画された研修会での講師依頼を受けた。実際にワンタッチテントやドーム型テントを立てて寝てみる体験を盛り込んだ。

- ・男鹿市女性消防団の研修では防災講座（夜間）を実施し、新聞紙などの防災グッズへの活用について学習した。ここから中学校での学習や町内会での場づくりへと広がりが見られた。
- ・男鹿潟上南秋地区の養護教諭・保健主事研修会では、ドーム型テントの設営や百均の目隠しポンチョを使用した段ボールトイレの着座体験などを実施した。実際にやってみることで、「これならいける」という意見や「音や顔が見えて恥ずかしい」といった体験的な気付きや学びを得ることができた。この体験が行動につながり、各学校の保健室に簡易トイレを配備する動きが生まれた。
- ・潟上市コンソーシアムでは、「何かやりたいが何をしてよいか分からない」という相談を受けた。新聞紙で防災グッズを作ったり、防災レシピの一つであるポリ袋で調理した焼きそばを食べたり、のんびり学ぶ場を提供した。
- ・小坂町奨励員研修会では、町の備品（テントや段ボールベッド）を使って大人と子どもと一緒に学び、いざという時の「設営者」になれるような自分事としての防災を考えた。
- ・障害者スポーツに関しては、障害の有無に関係なく、ルールを工夫してみんなが楽しめる場を目指している。
- ・秋田市身体障害者スポーツ交流大会では、職員が作った手作りの紙製モルックを活用して交流した。参加者の後ろに立ち、ふらついた際のクッション役を務めるなど、マニュアルにない合理的配慮の一つひとつ学ばせてもらっている。
- ・県南社会教育主事協議会では、会場（大綱交流館）のカーペットの模様を活かしてボッチャのコートを設営し、場所に合わせて工夫する考え方を伝えた。
- ・通所施設連絡協議会で実施したボッチャでは、会場（角館交流センター）の広さに合わせ車椅子利用者のボックスは1メートルを確保しつつそれ以外を狭くするなど、場所や参加者に合わせたコートづくりを工夫した。
- ・「熟議」による地域づくりでは、結論を出すことよりも、目標を共有し自分に何ができるかを考える協働の考え方を身に付けることを大事にしている。否定せずに受け止めるというマナーを重視し、こだわりを捨てて「自分がやる、自分もやる」ことを大切にしている。
- ・脇本第一小学校のCS「熟議」では、前向きな意見が多く出され、特に若い先生から本音が出るなどよい場づくりができた。
- ・横手ジュニアリーダーのつどいでは、中高生を対象とした「熟議」をおこなった。意見を言うことに抵抗がある中学生がLINEで意見を送ってくる場面があった。このような子どもに対しても、付箋などを使って自由に話せる場を作ることで、多くの意見を引き出すことができた。
- ・「あきたスマートカレッジ」で「熟議」を進めるファシリテーターの養成講座を4回シリーズで開催した。受講者の一人が、地元で中学生を集めた「熟議」のコンテストを自ら企画・運営し、多くの意見を引き出していた。学んだことを地元で活かしてくれる動きは大変ありがたい。自分たちだけでは限界があるため、このように人材を増やしていくことが重要であると考えている。

- ・車椅子での街歩き事業に続き「アルクベ・イウベ・キクベ (デフバージョン)」をおこなった。ヘッドフォンでノイズを流し、実際に聞こえない状態で街に出るといった試みである。専用のミッションカードや、水性ペンで書いて消せるコミュニケーションボード、指文字・手話の簡易表を持ち、ランチ注文などのミッションに挑戦した。「駐車場で後ろから車が来るのが分からず、自分がどうい状況にいるのか把握できないのが怖い」とか、ランチミッションでは、「周りに人がいるのに会話ができないため寂しいランチになった」などの声があった。今回は少人数の「お試しバージョン」としての実施であったが、次年度以降はこうした体験型の学びを研修等にも本格的に取り入れていきたい。

○障害者の生涯学習に関する調査研究（担当職員）

- ・障害者の生涯学習を推進するために、市町村や特別支援学校、障害者支援施設、民間企業と連携・協働しながら、学びの場づくりや新たな学びのジャンル開拓を検討してきた。
- ・オーダーメイド型社会教育主事派遣事業では、仙北市、北秋田市、八峰町、大仙市の4市町と学びの場づくりをおこなってきた。仙北市や北秋田市は、数年の継続的な取組を経て、市が単独で講座を運営できる体制が整いつつある。今後は4市町と振り返りを行い、来年度への方向性を確かめていきたい。
- ・昨年度から研究を進めてきたモルックを活用し、今年度初めてセンターを会場に体験交流会を開催した。延べ約30名の参加者と交流を深めることができ、新たなスポーツの定着を実感している。
- ・特別支援学校での防災講座や、約90名が参加した「第6回あきたWith杯ボッチャ交流大会」など、学校や民間企業との連携・協働も継続している。今年度は新しく始めた取組と継続してきた取組が合わさり、充実した形で事業を進めることができた。

○ツドウベースの活用（担当職員）

- ・12月末までの延べ利用者数は約1,200名となった。主な利用者として特別支援学校の卒業生や障害当事者の方々、太極拳を通じて障害者の生涯学習を実践している団体、身体障害者協会、精神障害者スポーツ推進協議会、各当事者団体などが挙げられる。
- ・着実に学びの輪が広がっている。今後も障害の有無に関わらず、誰もが楽しく学べる場とするために、利用者や関わる方々一人ひとりの声を大切にしながら一步一步確実に前進していきたい。

○市町村・公民館等職員専門研修、研究大会（担当職員）

- ・センター職員が講師を務める新任職員等基礎研修では、学習相談員の皆川による社会教育の講話に加え、柏木チームリーダーが「障害者の生涯学習ははじめの一步」と題し、市町村職員が初めて課題に向き合う際の視点を伝える研修を行

った。県内のみならず他県からの応募があり、岩手県からは16名もの参加があるなど、広域的な学びの場となった。

- ・地域学校協働活動推進員・地域連携担当教職員等研修会を実施した。センターが普及に努めてきた「熟議」について、現場へのさらなる浸透を図るべく、全県の市町村や学校から多くの参加者を迎えて「熟議」体験をおこなった。
- ・市町村・公民館職員等を対象とした専門研修は3回実施した。第1回「学びのユニバーサルデザイン、みんなでスポーツを楽しもう」では、講堂に実際のコートを設定し、ボッチャやモルックを通じて誰もがスポーツを楽しめる環境づくりを体験的に学んだ。
- ・第2回は県内の防災の第一人者である及川真一氏を招き、「防災を楽しく学ぶ～アウトドア防災のすすめ～」というテーマで講演いただいた。普段使用しているテント等のアウトドアグッズを、いかに防災に役立てるかという「フェーズフリー」の視点を深めた。
- ・第3回は日本ボッチャ選手権出場者である齊藤悠人氏を講師に迎え、山王の街を車椅子で実際に歩く「アルクベ・イウベ・キクベ」を実施した。当事者の視点から街を見つめ直す実践的な研修となった。
- ・研究大会では、岩手大学名誉教授の新妻二男氏を招き、社会教育施設のあり方について講話をいただいた。午後の実践発表では、秋田県聴力障害者協会との協働事例を報告した。東京デフリンピック関連イベントへの参加など、今年度の新しい取組を通じて我々職員も大きな学びを得ており、この分野をさらに深める必要性を実感している。
- ・「熟議」がコミュニティ・スクール以外でも広く活用できる可能性が見えてきた。次年度も同様のラインナップを予定しているが、単に同じ内容を繰り返すのではなく、それぞれの分野で一歩進んだ内容にするための工夫を加えた研修を計画している。多くの人々と協働し、我々も共に学びを深めていきたいと考えている。

○家庭教育支援指導者等研修（担当職員）

- ・「地域のつながりで支援の輪を広げ、保護者と子どもをサポートしよう」を年間テーマに掲げ、全4回の研修を実施した。前回の委員会報告以降は、第3回「家庭での困り感や様々な課題に対応した家庭教育支援」、第4回「地域のつながりで家庭教育支援の輪を広げよう」をテーマに開催し、年間で延べ130名が参加した。
- ・各分野のスペシャリストを招へいするとともに、家庭教育支援のあり方やつながり作りを「自分ごと」として考える時間を設けた。最終回では自身の「社会関係資本（ソーシャルキャピタル）」を棚卸しする実践を行い、参加者が自分の中にある多様なつながりに改めて気付く機会となった。参加者からは「話し合いを通じて人とつながることは難しくないと感じることができた」という感想が寄せられ充実した研修となった。

- ・家庭教育支援チームの有無に関わらず、全ての市町村にとって魅力的かつ実践的な研修となるように努めていく。次年度は現代的な課題である「引きこもり」へのアプローチとして、NHKの番組でも取り上げられた藤里町社会福祉協議会の菊池まゆみ氏を講師に迎える計画を立てている。

○オーダーメイド型社会教育主事派遣（担当職員）

- ・今年度は3市および1県立高校からエントリーがあった。大仙市（4年目）では、コミュニティ・スクール導入3年目の2地区と初年度の2地区において、センターが「熟議」の進行を担当した。
- ・横手市（初年度）では小中学校の国語科教員、ジュニアリーダー、学校運営協議会委員など、多様な主体を対象とした「熟議」を実施した。
- ・初年度のかほ市と2年目の大館桂桜高校については、打ち合わせ段階に留まり、具体的な活動まで一歩踏み込めなかったという反省点がある。今後はアンケート結果をもとに2月中に各依頼元を訪問し、次年度の方向性を協議する予定である。

○あきたスマートカレッジ（担当職員）

- ・全26講座を無料、有料の形式で展開している。有料講座では教養分野を継続し、無料講座では「地域づくり分野」や「現代的課題」に関わる内容（A～D講座）に注力しており、大きな成果が見られている。
- ・「地域づくり分野」の「熟議ファシリテーター講座」は、定員を上回る申込みがあった。全4回のうち初回を体験型、以降を全受講とする形式で、県外からの申込みもあった。
- ・現代的課題の障害者の生涯学習・防災講座でも申込が定員を超える状況となった。特にここ数年の傾向として、10代から20代の若い世代の受講が増えているのが特徴である。
- ・障害者の生涯学習講座については、障害の有無に関わらず広く申込みがあり、共に活動することで交流や意識の高まりが見られる充実した内容となった。次年度も同様に広く募集していく方針である。
- ・運営面では「電子申請（秋田県スマート申請）」の利用率が、昨年の24.9%から42.1%へと大幅に増えた。
- ・次年度のラインナップは現在調整中であり、3月末には詳細な情報を提供できる見込みである。

○展示スペース活用（担当職員）

- ・8月から今月にかけて、「地域学校展」や「作業学習製品作品展」など多様な主体による展示が行われた。
- ・今年度は、サークルや特別支援学校、市民サービスセンターなど、計3個人6団体による展示が行われた。開催期間中の延べ来館者数は約1万3,000人にのぼり、多くの方々に作品を観覧いただく機会となった。

- ・来年度はすでに1個人5団体からの申込みがあり、うち1個人は初めての出展となる。今後も出展者の要望にできる限り寄り添いながら、よりよい展示の場となるよう運営に努めていきたい。

(2) 来年度の主な事業計画

○委員長より、案件2「来年度の主な事業計画」については各担当者の報告内に含まれていた旨が確認された。

(3) その他（質疑応答・意見等）

- A委員
- ・各事業のレポートに掲載されている参加者のアンケートや個人の声が非常に具体的で、現地の状況や実感がよく伝わる内容であった。
 - ・児童会館で実施された防災講座においても、座学だけでなくテントの設営やクイズ形式のプログラムがあったことで、子どもたちが引き込まれ、父親世代の関心も高まるなど非常に効果的であった。
 - ・個人的にも「透明ボトルに薬や連絡先を入れて準備しておく」という具体的な備えの手法が非常に参考になった。
 - ・あきたスマートカレッジの「熟議ファシリテーター講座」等が定員を超える人気である。複数の受付方法（電話、メール、電子申請など）を併用する際、受付に時間差が生じる場合や、電話対応中に電子申請が届くなど、申込みが重複した際の優先順位の付け方や処理の仕組みについて、他施設での運営の参考とするため伺いたい。

担当

- ・講座の申込みについては、受付時間の前後による混乱を防ぐため、現在は電話での受付は行っていない。
- ・メールや電子申請など、受信した時系列に基づき正確に受付を行うことで、公平性を保っている。
- ・定員に達した際に機械的に断るのではなく、問合せに対して申込み状況を知らせながら対応している。実際には、若干のゆとりをもたせながら、申込み状況に応じて途中で定員枠を増やすなどの配慮を行っており、一人でも多くの県民に体験の機会を提供できるよう努めている。
- ・形式的な受付に終始するのではなく、所内で協議しながら、希望者がよりよく受講できる形での運営を重視している。

- B委員
- ・当初の計画になかった事業を数多く受け入れている点について、組織としての余白のたせ方やキャパシティの把握が適切になされていると感じ、素晴らしい取組である。
 - ・市街地でのクマ出没という想定外の事態に対し、施設スタッフの立場から、事業ストップの判断と開催責任の板挟みになる苦労があると

思われる。

- ・施設利用において、1月まで夜間利用を休止したほか、具体的にどのような配慮や制限を行っていたのか、今後の危機管理の共有として詳しく伺いたい。

総務チーム
リーダー

- ・11月中旬、近隣の児童会館や図書館からクマの目撃情報が提供されたことを受け、3施設で協議した。センターでは安全確保のため、まず夜間の利用を当面の間停止することを決定した。
- ・自動ドアからの侵入を防ぐため、正面の自動ドアを完全に閉鎖する措置を取った。代替りの入り口として、自動ドア脇にある非常用ドアを利用者へ案内しており、この対応は現在も継続している。自動ドアの開放時期については現時点で未定である。
- ・非常用ドアでは通行が困難な大型荷物の搬入や搬出が必要な場合には、総務室への連絡により職員立ち会いのもとで自動ドアを一時的に開放する運用としている。閉鎖措置を開始して以降、実際に荷物搬入のために自動ドアを開放した事例は現在のところない。

- ・施設管理とは違うが、イベント開催を減らしたことはあるか。

学習事業
チーム
リーダー

- ・主催事業については、目撃情報と近隣の状況を精査し、安全が確保できる範囲内であるかを都度判断して実施した。一方、貸館等の主催者が別にいる場合は、最終的な実施判断を各主催者へ委ねる形をとった。
- ・自動ドア閉鎖の運用開始直後は、利用者を迷わずに非常用ドアへ誘導できているか、また非常用ドアが確実に閉められているかなど、職員が玄関付近で一週間程度細やかに様子を観察した。「これなら運用可能である」と現場の状況を確認した上で、継続的な対応につなげた。

- ・近隣施設から即座に目撃情報が共有される体制があれば適切な判断が可能だが、情報がなければ無防備にイベントを開催してしまうリスクがある。発生直後に近隣の3施設ですぐに協議の場をもったという例は、他の施設でも参考にすべき非常に有意義な危機管理の形である。

学習事業
チーム
リーダー

- ・近隣にクマが出没したという情報を得て、参加者の帰宅について対応が必要と思われる場面があったが、秋田市に確認したところ「誤情報」であったことが判明した。いかにして正しい情報を収集できるかが重要である。

- C委員
- ・以前受講した家庭教育支援に関する研修をきっかけに、地元自治体での支援チーム結成に至った。
 - ・及川先生の講座を地元へ招致し、子ども会で市の備品（テント・ベッド等）の設営やトイレ体験を実施した。非常に有意義であった。
 - ・自治会で卓球バレーの指導を依頼した際、体験した外国人が帰国後も活動を希望し、こちらから用具セットを送るほどの感銘を受けていた。センターの事業は「広げたい」と思わせる素晴らしい演出がなされている。
 - ・県の方針として各市町村への家庭教育支援チーム設置を目指している中、本研修の参加者が減少傾向にある点を懸念している。内容は非常によいため、遠方からの参加が困難な層に向けて、コロナ禍でおこなっていたオンラインとのハイブリッド開催復活を検討してはどうか。
 - ・昨年受講した熟議ファシリテーター講座の継続開催を希望する。習熟度別のクラス分けなど、地域で活躍できる人材を段階的に育てる仕組みがあれば、地域における協働の形がさらに広がっていくと考えている。

学習事業
チーム
リーダー

- ・家庭教育支援指導者等研修については、単に「人数を集める」ことを目的とした研修ではないと考えている。家庭教育の基礎を学びたいと願う人が一人でもいれば、その人のために100人が受講している時と変わらぬ熱量で実施すべき「セーフティーネット」的な役割をもつ講座である。センターとして、提供する内容の質をしっかりと保証し、継続していくことが重要であると考えている。
- ・各市町村に対して「どのような時期、形態であれば参加しやすいか」を個別に聞き取り調査している。一律の開催方法に当てはめるのではなく、自治体ごとの実情を丁寧に汲み取りながら、少しでも支援の輪が広がるよう細やかな手立てを打っていく。

- D委員
- ・当市では「学校・家庭・地域」と「障害者の生涯学習」の二つの分野でオーダーメイド型社会教育主事派遣事業を活用している。市町村ごとに異なる課題や進め方の違いがある中、センターが非常に丁寧に聞き取りを行い、実情に即したアドバイスをくれたことに感謝している。
 - ・関係機関との連携において、多様な視点があったが、センターが調整機能を発揮してくれたことで、相互理解が深まり円滑に進めることができた。
 - ・第一歩を進める上で、仕組みづくりに当初頭を悩ませていた。センターから「まずはやってみよう」という視点を提示されたことが、自身にとって大きな一歩を踏み出すきっかけとなった。来年度の当市の取組は、センターが掲げる3つの柱の考え方を踏まえつつ、当市の状況

に応じた形で進める予定であり、引き続き助言をいただきながら進めていきたい。

学習事業

チーム
リーダー

- ・私たちが最終的に目指すところは「持続可能な地域づくり」にある。そのため、既存のメニューに一律に当てはめるような支援ではなく丁寧話を聞いて寄り添いながらどのような形がよいか見出していきたい。

E 委員

- ・自身の会社でも社員の約8割が防災士資格を取得するなど、防災には力を入れている。昨年個人としてもキャンパーになり、教科書的な知識だけでなく実践的な学びの重要性を痛感した。
- ・天候や道具によって状況が変わる屋外での活動は、避難所に入りきれない事態（高齢者や子どもを優先し、健康な大人が外で過ごす場合など）を想定した際に非常に重要となる。今後は屋内での研修から一歩進み、より実践的、屋外的な能力を高めるようなワンステップ上の研修への展開も検討してはどうか。
- ・中学生がLINEで意見を伝えるというエピソードに関連し、これは子どもに限らず「否定されるのが怖い」と感じる大人にも共通する課題である。若いうちから「否定をしない」というルールのもとで、自分の意見を安心して出せる場を体験することは、将来の社会を築く上で極めて重要である。こうした機会を提供し続けているセンターの取組は大事である。

学習事業

チーム
リーダー

- ・私自身は北海道を一週間テントで回るなどの経験を通して、屋外活動の難しさを実感している。
- ・実際に障害のある方々と「北欧の杜」のキャンプ場で共に炊き出しを行うなどの活動実績がある。メスティンでの炊飯を例に挙げると、屋内では固形燃料で簡単に炊けるが、屋外では風の影響で炎が揺らぎ、なかなか炊けないといった違いが生じる。
- ・委員のご指摘どおり「様々な条件下」で体験を積むことは非常に重要であると考えており、今後も多様な体験の機会を提供していきたい。

F 委員

- ・センターの多岐にわたる活動と職員の尽力に対し深く敬意を表す。
- ・これまでの報告ではボッチャやモルックなど体を動かす活動が中心であったが、障害者の学習はスポーツだけではないと考えている。（NHKの番組を例に挙げ）障害者が生み出す絵画や造形作品の素晴らしさにふれている。芸術関係ではどのような活動をしているのか。
- ・大仙市のショッピングモールでの作品展示事例が記載されているが、

それ以外にセンターとして障害者の芸術関係に対してどのような施策をおこなっているか、または、今後行う予定があるかについて伺いたい。

学習事業
チーム
リーダー

- ・アートなどの特定の分野に絞ることを重視しているわけではなく、障害のある方の学びをどう作っていくかというところに重点を置いている。
- ・スポーツを前面に出しているのは、比較的ルールが簡単で身体への負荷も少なく、多くの方が分かりやすく楽しめるからである。
- ・県民向け講座の「あきたスマートカレッジ」において、専門家を招いたアートの学びの場を提供している。
- ・ツドウベースの地下ホールにおいて、集まった方々がアート制作を行えるような環境づくりや場所の提供をおこなっている。
- ・県立近代美術館において、障害の有無に関わらずアートを楽しむための講座を作り出すファシリテーションの協力をおこなった。その後、実際にキンビコミュニケーターが学びの場を作り出した。
- ・アートは学びの重要な選択肢の一つとして捉えており、特別に取り出して報告していないだけで、実際には多様な形で提供や協力を行っている。

副委員長

- ・日々の業務が多忙を極める中、当初の予定になかった突発的な依頼やニーズに対しても柔軟に事業を組み入れ、対応していることに対してありがたく思う。センターの大きな柱である情報発信、研修、人材育成の機能を、今後さらに充実させてほしい。
- ・センターでの体験を持ち帰り、地域で実践している奨励員の動きを注視し、支援を継続していただきたい。
- ・県全体が目指している誰一人取り残さない社会の実現に向け、センターは多様な情報提供を行う上で重要な位置を占めている。今後もよろしくお願ひしたい。

学習事業
チーム
リーダー

- ・予定にない事業を数多く引き受けていることへの心配に対し、決して余裕があるから受けているわけではないが、それこそがセンターの存在価値であると考えている。
- ・センター内だけではなく、それぞれの場所で学びを広げていくことが重要である。「学びを止めるな」という強い思いをもち、センターの職員が現地に赴くことで学びが広がるのであれば、喜んで引き受けるという姿勢で取り組んでいる。
- ・奨励員の方々が地域で核となって活動している。頑張っている人たちには、センターとしても全力で応えていきたい。

委員長

- ・センターの事業が「体験した人が自分でもやりたい、またやりたい」と思うように動き出している。こうした動きを引き出す「種まき」こそが、センターのもつ力である。
- ・副委員長の発言にもあった「楽しいからやる」という視点において、学ぶ者に寄り添う力が生涯学習の本質である。防災や地域課題など、現代社会が何事にも白黒を付けたがる傾向にある中で、あえてグレーゾーンをそのままに受け入れ、広げていこうとするセンターの取組を今後も続けてほしい。

6 所長あいさつ

委員から寄せられたご意見やセンターへの期待を真摯に受け止め、今後のセンター運営に活かしていきたい。この時期（1月から3月）は、次年度の計画立案における重要な時期である。本日のご意見やご感想を反映させ、よりよい事業運営ができるよう努力していきたい。今後ともご協力ご支援をお願いする。

7 閉会